

アルゼンチン調査団 海外豆類事情調査結果の概要

(公財)日本豆類協会

●はじめに

日本豆類協会では、海外における豆類の生産・流通・消費の状況をはじめ農業、食料、社会経済等の動向を実地で調査して参考となる情報を収集し、豆類関係業界の関係者の皆様に提供することを目的として、海外豆類事情調査を実施しています。

我が国の小豆・いんげんの輸入状況を見ると、カナダ・中国・アメリカを除けば、アルゼンチン共和国からの輸入が堅調であり、今後さらに重要な輸入先国となる可能性があります。そこで、2025年度は、同国を調査対象国とし、豆類の生産・流通・輸入・実需の各分野及び当協会の合計6名で構成された調査団が、5月10日から5月18日までの日程で現地調査を実施しました。

本稿では調査結果の概要をご報告します。

●1. 調査団の構成

	氏名	所属
団長	甘糟 薫一郎	雑穀輸入協議会副理事長
副団長	湊 喜昭	全国穀物商協同組合連合会副理事長
団員	鈴木 健司	雑穀輸入協議会理事
団員	岩崎 将士	佃屋食品工業株式会社営業主任
団員	鮫島 武	ホクレン東京支店農産課長
団員	高野 浩文	日本豆類協会事務局長

●2. 調査日程

日程	場所	移動手段	訪問先
5月10日(土)	羽田出発 フランクフルト経由	航空機	
5月11日(日)	ブエノスアイレス到着	バス	スーパーマーケット
5月12日(月)	ブエノスアイレス市内	バス	日本国大使館 農牧水産庁 Alicampo社
5月13日(火)	サルタに移動	航空機、バス	国立農牧技術院サルタ 加工施設・農場
5月14日(水)	トゥクマンに移動	バス	加工施設・農場 オビスポコロンプレス農事試験場
5月15日(木)	ブエノスアイレスに移動	バス、航空機	加工施設
5月16日(金)	ブエノスアイレス出発	航空機	
5月17日(土)	フランクフルト経由	航空機	
5月18日(日)	羽田着		



出典：在アルゼンチン日本国大使館HP掲載の地図を一部改変

3. 訪問先での調査概要

5月11日(日)

午前にブエノスアイレス (Buenos Aires) に到着し、午後に市内スーパーマーケットを視察しました。

○市内スーパーマーケット視察

ブエノスアイレス自治市内のスーパーマーケット「JUMBO」にて、豆類の販売状況を視察しました。販売価格はレンズ豆が2,999ペソ/500g、ブラックキドニーが2,499ペソ/500gなどでした。(1アルゼンチンペソ=約0.13円(5月12日時点))



5月12日(月)

ブエノスアイレス (Buenos Aires) 自治市中心部に所在する日本国大使館、農牧水産庁さらには郊外の輸出業者を訪問しました。農牧水産庁では政府関係機関に集まっていたの意見交換を行いました。

①在アルゼンチン日本国大使館訪問（ブエノスアイレス自治市中心部）

山内弘志氏（特命全権大使）、山路拓也氏（二等書記官）を表敬訪問したところ、山内大使から、アルゼンチンの最近の状況につき次のようなお話があり、あわせて調査団への激励のお言葉をいただきました。

アルゼンチンは中南米の中では比較的治安の良い国で、これまでインフレーションが激しかったところ、2023年にミレイ（Milei）大統領が就任して以降、歳出の大幅削減、規制緩和が進められており、最近インフレーションが急速に収まってきています。輸出額の6割がとうもろこし、大豆、小麦などの農林水産物であり、それらへの輸出税が大きな歳入源となっており、牛肉の輸出も盛んで、現政権は輸出をさらに促進するためのさまざまな措置を実施しています。大豆は8割、牛肉は6割が中国向けですが現政権は輸出先を多角化したい意向です。

②アルゼンチン政府関係機関との合同意見交換（農牧水産庁（ブエノスアイレス自治市中心部）にて）

せっかくの機会であり、アルゼンチン政府関係の3機関の関係者が一堂に集まったの意見交換を設営していただきました。

参加機関は次のとおりです。

- ・農牧水産庁（Secretaría de Agricultura, Ganadería y Pesca：SAGyP）
- ・国立種子類研究所（Instituto Nacional de Semillas：INASE）
- ・国家農畜産品衛生管理機構
（Servicio Nacional de Sanidad y Calidad
Agroalimentaria：SENASA）

SAGyPのGambale農業生産局長から歓迎の挨拶、農業生産局顧問のLopez氏から同国の豆類をめぐる状況について説明がありました。生産量はいんげん、えんどう、ひよこ豆、レンズ豆が多く、中央地域（ブエノスアイレス（Buenos Aires）州ほか）及び北西部（サルタ（Salta）州、トゥクマン（Tucumán）州ほか）での生産が多いこと、国内消費は少なく輸出向けが多く、輸出手続きの簡素化を図ってさらなる輸出の増加



に期待しているとのことでした。また、「豆類戦略プラン」(2023年策定)で、研究開発への持続的な投資の拡大や付加価値の向上などを行っているとのことでした。

アルゼンチンから日本への輸出に関する課題について、当方からは、安定した品質で供給することが重要であるとし、特に、過去に小豆へのササゲ混入や残留農薬の検出といった事案が発生したことを指摘して、そのようなことのないよう種子管理や農薬の適正使用の徹底が重要であることを強調しました。先方から、日本から小豆の種子を提供することは可能かとの質問があり、現在、日本への主要輸出国となっているカナダではアメリカの種苗会社からエリモショウズの種子を購入しており、同様に対応することが考えられるのではないかと答えました。

日本の豆類消費の状況についての質問があり、日本では豆類は甘く煮て食べることが多いことを説明しました。これに対し、アルゼンチンでは、夏はサラダ、フムス、冬は煮込み料理に使われ、最近ではハンバーグ、ビスケットの材料にもなっているとの説明がありました。

最後に、先方から、小豆やいんげんは外貨獲得手段として重視しており、引き続き日本側と情報交換を行っていききたい旨の発言があり、意見交換を終えました。

③Alicampo社訪問(輸出業者)(ブエノスアイレス自治市郊外)

Horacio Fragola氏(Alicampo CEO、輸出業者の団体CLERAの役員)から同社の概要について説明がありました。

同社は約30年前から日本に小豆を輸出し、今は白いんげんも日本に輸出しています。本年産の作柄については、早め(2~3月)に播種した場所は雨や強風で被害を受けている一方、遅め(4月)に播種した場所は良好だが今後の霜が心配であるとのことでした。



5月13日(火)

ブエノスアイレスからサルタ(Salta)に航空機で移動し、研究機関(INTA-Salta)や圃場、選別施設を視察しました。

①アルゼンチン国立農牧技術院—サルタ訪問（サルタ市内）

Instituto Nacional de Técnica Agrícola - Salta : INTA-Salta

この訪問の様子は、INTA-SaltaのInstagram、YouTubeで紹介されています。

<https://www.instagram.com/p/DJroSZGTIAI/>

<https://www.Youtube.com/watch?V=zIDUIMRLqeo>

<https://youtu.be/opuHUnRv8Qw?si=1fY0rI36shLNvMZs>（甘糟団長インタビュー）

また、参加された北部穀物生産者協会（PROGRAMO (Asociación de Productores de Granos del Norte)）のInstagramでも紹介されています。

<https://www.instagram.com/p/DJrwjCXpE4V/>

サルタ州における豆類生産の概要についての説明がありました。白いんげんを中心にダークレッドや黒いんげんも栽培されており、本年産は1～3月に播種されましたが、1～2月に高温が続いたため状況は良くないとのことでした。

引き続き試験圃場を視察しました。いんげん中心に44種の未登録品種を栽培しており、豆類改良プロジェクトでは機械収穫特性を上げるため直立になる品種改良をしているとのことでした。

INTA-Saltaの地元テレビ番組のインタビューがありました。

②Mendez Negocios Agropecuarios社選別施設
視察(サルタ市郊外)

選別は種子用と通常用の2ラインあり、通常ラインは1時間に5トン、種子用ラインは1時間に2.5トン選別しています。



③Diego農場 (Miguel Torino氏の下請生産者農場) 視察 (サルタ市郊外)

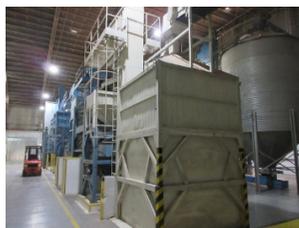
視察した畑は46ヘクタールで、白いんげん (アルビアの新品種) を栽培しています。刈り取りの半分は手作業で行い、その後寝かせて乾燥するとのことです。



④Alimar S.A.選別施設視察

(サルタ州、General Güemes地区)

選別は3ラインあり風選・サイズスクリーン4回・比重選2回・電光選別と1時間あたり2.5トン選別しています。



5月14日 (木)

サルタからトゥクマン (Tucumán) にバスで移動。その途中で圃場を視察し、トゥクマンでは研究機関 (EEAOC) を訪問しました。

①Cusillos S.A.圃場視察 (トゥクマン州、Antilla地区)

訪問した農場は600ヘクタールのダークレッドインゲンの圃場で、刈り倒しするのは5割、枯凋剤によるのが5割とのことです。アルゼンチンで開発されたシステム(SIMA-Integrated Agricultural Monitoring System (農業監視システム)) を活用して農薬使用しているとのことです。



②Ortega氏の圃場視察 (トゥクマン州、La Ramada地区)

小豆は以前は120ヘクタール栽培したことがあるものの今は54ヘクタールです。小豆圃場にササゲが見当たらなかったのどどのように除去したか質問したところ、ある程度生育した段階で除草剤のホメサフェンを1ヘクタールあたり600cm²使用して除去したとのことです。



③ トウクマン州オビスポ・コロンブレス農事試験場訪問

(San Miguel de Tucumán市)

Estación Experimental Agroindustrial Obispo Colombres (EEAOC)

この訪問の様子はEEAOCのインスタグラムで紹介されています。

<https://www.instagram.com/reel/DJtrVG4uoMP/>

乾燥豆類プロジェクトコーディネーターのEspeche氏からプロジェクトの概要の説明があり、遺伝子改良（新たな遺伝資源の導入と交配）と栽培プロセスの2本柱であること、遺伝資源については、コロンビア、インド、オーストラリアのジーンバンクから導入していることなどの説明がありました。

研究所の運営資金としては、生産者の拠出金額の0.5%が拠出されており、生産者がEEAOCの役員に就いているほか技術アドバイザー委員会にも参加しているとのこと。品種改良は病虫害、品質に重点を置いており、今は気候変動による干ばつ対策に重点を置いていたとのことでした。また、日本向けに適した品種開発を行いたいので日本から遺伝資源の提供を受けたいとの話がありました。



5月15日（金）

カタマルカ（Catamarca）州の加工施設を視察しました。この他、EEAOCの協力生産者の圃場を視察予定でしたが、都合がつかず中止になり、今回の調査を終えました。同日中に航空機でブエノスアイレスに戻り、翌日に帰国の途につきました。

○Mistol Ancho社加工施設視察

(カタマルカ (Catamarca) 州、Los Altos地区)

小豆は120ヘクタール作付けし150トンの収穫予想です。収穫には除草剤を使用せず刈り取り・畑にて乾燥するとのこと。ササゲの混



入を防ぐために100名で抜き取り作業をしているとのことでした。

● 調査を終えて

アルゼンチンでは2023年（令和5年）12月にミレイ（Milei）政権が発足し、政府支出の大幅な削減や規制緩和などの施策を次々に打ち出し、インフレーションは収まってきています。

①アルゼンチンの潜在的可能性

ミレイ政権は外貨獲得の観点から同国の主力輸出産業である農産物輸出のさらなる振興を目指しており、豆類についても輸出税が廃止され、2023年に策定した「豆類戦略プラン」をもとに官民共同で研究投資の拡大や海外市場開拓に乗り出しています。今回農牧水産庁で行われた意見交換でも、日本への豆類輸出について強い関心を持っていることがうかがえました。日本にとっての豆類調達先としての同国の潜在的可能性は大きいものと考えられます。

②課題

一方で、これまでのアルゼンチンから日本への豆類輸出においては、異種穀粒混入の問題（小豆にササゲが混入）、選別の不徹底（石や夾雑物）さらには残留農薬検出といった問題点がありました。今回このことを率直に各訪問先に伝達し問題解決方法を話し合えたこと自体、大いに意義があったと考えています。一方、先方からは、特に残留農薬に関して、日本の情報が不足している、あるいは届くのに時間がかかるという不満が示されており、これまで日本側と現地との情報共有が不十分であったものと考えられます。アルゼンチンの潜在的可能性を現実のものとするためにはこれまで以上にコミュニケーションを密にすることが重要と考えられます。

③「甘い豆」の可能性

今回、最終商品がどのようなものなのかを現地の方々にも知っていただこうと、どら焼き、あんバター、煮豆（金時豆）を持参したところ、大変好評でした。

拡大し続けている旺盛なインバウンド需要に



対し、「甘い豆」を売り込んでいくことには大いに可能性があるものと考えられます。

最後に、このたびの調査訪問を通じてアルゼンチンの日本にとっての豆類調達先としての潜在的可能性を再認識することができました。これを契機に今後の同国との協力関係が一層深まることを願っております。

